

『日葡辞書』に採録された食に関する語彙について
第4報 嗜好品に関する語彙について
松本仲子（女子栄養大）

目的 東北大学狩野文庫に架蔵される『南蛮料理書』を理解するためには、多面的な検討が必要であると考え、これまではルイス・フロイス『日本史』、アレシャンドウロ・ヴァリニャノ『日本巡察記』などを資料として、成立の推定を行ってきた。次いで調理方法の記述を検討するにあたっては、まず語彙の整理が必要であるところから、『日葡辞書』を資料として、収録される食に関する語彙を採集して検討することとした。

方法 資料の『日葡辞書』は、イエズス会宣教師が日本において聴罪、説教を行うにあたって必要とされる日本語習得のために長崎のコレジオにおいて編纂され、1603年に刊行された辞書である。中世から近世にかけての日常の話し言葉を中心に、広汎な分野に亘る語が採録されている点、当時の辞書類が漢字を中心とした字書、歌の用語を収めた辞書の他には存在しなかった中であって、生活用語を研究するうえで極めて有用な資料である。岩波書店発行の和訳『日葡辞書』を底本として、それに収録される食に関する語について全てを採取し、分類して、今回は嗜好品の菓子、酒、茶に関する語について検討した。

結果 菓子に関する語彙は、材料別に分けると米を材料とする餅類25、団子4、煎餅など2、小麦粉は饅頭、麩焼など7、黍や豆3、昆布3で、餅類が多い。酒については日本酒、焼酎、葡萄酒があり、日本酒には菊、桑、枸杞を加えるものがあった。また酒の勧め方や飲み方に関する語が多い。茶については粉に碾いた抹茶の色、新旧、上等下等などのほか、製茶、保存などに関する語がある。また布教の手段の一つとして南蛮寺にも茶室を設けるなど茶道への関心が強かったことから、茶道具などの語も採取されている。